

座 談 会

# 仕事と生活のなかの 見えない現実

田中 早苗

弁護士



玄田 有史

東京大学社会科学研究所助教授



浜田 敬子

『AERA』副編集長



## 消極的な 20 代

玄田 浜田さんは『アエラ (AERA)』の編集、何年目ですか？

浜田 6年目です。

玄田 記事で、仕事や、恋愛、結婚とかで、変化を感じることはありますか。

浜田 20代の人を考えを理解するのは難しいですね。最近掲載した企画では、こんな話がありました。たとえば会社の中で「自分のポジションが危うい」と思ったら、30代は頑張るか、転職する。でも20代は、「危うい」という状態を目の前にすると、「ああ、もうダメだ」と気持ちがあえてしまう。30代がすごく頑張っているのを見るだけで、「自分はもうだめだ。ここでは働けないかもしれない」って、週末引きこもりのような状態になってしまったりする。

仕事だけじゃなくて、恋愛にも消極的ですね。『電車男』という本が30万部以上も売れてます。女性と付き合ったことがない、話もできない22歳の男性が、ある日、電車の中で酔っぱらいにからまれていた女の子を助ける。後日、お礼の品が送られてきても、どうしていいかわからないから、日ごろからなじみのある「2ちゃんねる」に書き込む。そのなかでみんなの応援を受けて、徐々に恋愛に積極的になっていく……という実話なんですけど、アエラでこの特集記事を書いた20代の男性記者は、この恋愛観がとてよくわかったと言っていました。

恋愛にしろ、仕事にしろ、自分から積極的に踏み出していくことが苦手な人が多いなあ、というのが20代と接してみた印象です。

田中 テレビ番組でもありますよね。お笑い芸人の人が、アイドルの女の人とデートをするというのが。あれなんか、まさにそうですね。あんなの見てたって、自分でやったほうがおもしろいのにって思うけど、あれを見て満足するわけでしょう。そういうニーズがあるわけですよね。

玄田 「冬ソナ」と一緒ですね。

浜田 それは40代以上の人ですね。

玄田 何で「冬ソナ」がこんなに売れたの？

浜田 『アエラ』でも、たびたび分析はしていますが、まだ未知の部分が多いですね(笑)。

玄田 20代、30代の人の仕事や恋愛に関する訴訟

問題は増えたの？

田中 20代はセクハラはあるけれども、男女間のトラブルというのはあまりないですよ。

玄田 30代も？

田中 離婚という形でしかないですね。

玄田 最近の離婚に特徴がありますか？

田中 意識に違いはありますよ。昔は、「子はかすがい」じゃないですけど、そういうところがあったけれども、恋愛感情がなければ、男の人も女の人もスパッと切れるという形が多くはなっています。

玄田 残された子供は大変だ。

田中 そうです。子供の奪い合いがすごいですね。

玄田 奪い合うわけ？ 押しつけるんじゃないか。

田中 押しつけもあるけど、奪い合いもあります。今まで家庭のことに無頓着だった夫が、離婚を言い渡された途端、自分の生きがいも家庭もなくなる。それで、子供に生きがいを見つけるということで、苛烈な子供の奪い合いというのはあります。

## 「本当に好き」

玄田 団塊の世代の親って特徴がありますか。

浜田 今度団塊子育ての教訓という特集をしますが、団塊ジュニアのフリーター率がすごく高いんですね。それは、労働環境の変化だけではない理由があると感じています。老年学というテーマで定年退職前後の男の人に聞き取り調査をしている人がいて、団塊世代の人は自分がある種の理想を持っていて、それが挫折したという思いがあるそうです。

玄田 団塊の男性ですか？

浜田 男性です。子供に対しては、のびのび育てなければいけないとか、自分の考えを押しつけてはいけないんじゃないかと思っている。

玄田 子供に押しつけてしまうわけですか。

浜田 いや、むしろ何も押しつけられないんです。「こうやれ」って言うのは、それが子育てとしてはまずいだろうという理想があるわけです。で、結果的に子供に遠慮して、コミュニケーションがとれてないんです。

玄田 そのなかで若い人は「個性的に生きろ」ってずっと言われて、苦しくなってる。

浜田 子供は「好きに生きろ」と言われ、どうしていいかわからなくなる。

田中 個性的に生きろというのはウソだってわかっている。

玄田 親からのアドバイスというときに、とりあえず好きな仕事を選んでいいと言うのは、やめたほうがいい。大事なものはむしろ「とにかくこれだけはやってくれるな」と言うこと。新聞記者なんて商売やめるとか、弁護士なんて誰に刺されるからわからないからやめてくれとか（笑）。親が本気で、これだけはやめてくれというほうが子供はラクに選べる。

浜田 ほんとうに好きな仕事につきなさいとか、ほんとうに好きな人と結婚しなさいって言われると、みんな迷ってしまって難しい。30代以上、未婚、子ナシの「負け犬」が増えているのも、親からやはり好きな人と結婚しなさいと言われる続け、自分自身も絶対ここまで来たら本当に好きな人と結婚したいと思う。でも「本当に好き」ということが、どういうことかわからなくなっている。

玄田 「負け犬」ブームは何だったんですか。酒井（順子）さんの文章がうまかったから？

浜田 それもあります。でも、やっぱり、みんなが言いたくて言えなかったことを言ったということでしょう。

玄田 何が一番言いたかったの？

浜田 30代後半の独身女性に対して結婚のことを話題にするって言うことが、まずタブーだった。友達同士でも、なかなかそこは触れられない。「あなた、結婚したいの、したくないの？」とか言えません。それを直球でまず話題に乗せたというところでしょう。

玄田 すごい。

浜田 「負け犬」という単語はかなり心をざわつかせるものがあります。シングルと言っても、全然響かないですけど、「負け犬」と言ったところが絶妙。

玄田 イギリスのBBCの記者がやってきて、ニートについて取材させてくれと言うので「ニートはそっちが本場じゃないですか」と言ったら「いや、日本に来て初めて聞いた」と。「ところで、何で日本人は、ニートとかフリーターとか、負け犬とか、ラベルを張るのがそんなに好きなんですか」って言われて答えられなかった。そういうレッテル貼りが好きなのが社会にあるね。

田中 落ち着かないんですよ。規格という意識が強いから、規格外に生きている人たちは何者なのかを分析しないと、落ち着かないところがあるんじゃないん

ですか。

## 「意識しすぎ」

玄田 田中さんは、仕事とプライベートに関わる問題で、最近変化を感じることはありますか。

田中 変わってきてますね。セクハラは断然に認められやすくなってきてます。それに合わせて会社の意識は確実に変わってきてます。

玄田 何の影響でしょうか？

田中 やはり裁判ですね。98年の男女雇用機会均等法改正の影響だと思います。日本人には法律は守らなければいけないし、規格ができればその規格を守らなければという特質はありますよ。

玄田 まじめなんだ。

田中 そういうところはまじめですが、かなり大胆に、意識が変わってきていると思います。

玄田 ただ何か過度にセクハラを意識して、かえってうまくいかなかったりとかも。

田中 それはあるかもしれないですね。

玄田 セクハラではないですけど、人を育てるときには、会社の内外で上手に口説くのが必要なときもあるでしょう。あんまり仕事って割り切りすぎるとうまくいかない。

浜田 男性は上司とも飲みに行っていて、いろいろ社内情報も聞いて、帝王学のようなものも身につけていく。でも女性とは2人で飲みに行くのを何となく避けるから、女性だけ情報から疎外されるというか。どういう仕事をしたいかとか、どういう分野に進みたいとか、結局、男性だけ言える感じがしています。セクハラにしても「そんな別に意識しすぎなくても」と思うんですけど。

田中 ただ男性でも、上司と飲みに行くとか、そういう昔ながらのコミュニケーションって最近では嫌なのではないですか。

浜田 私は副編集長になってまだ半年なんですけど、ちゃんと仕事の話をするれば、みんなよく話すんです。「こんな企画がやってみたい」とか。いま昼間は日々の仕事に追われていて、なかなかコミュニケーションを取る時間すらない。上司の自慢とか説教にならないければ、夜ざっくばらんに話をするのは、個人的には部員の人の考えを知るためには必要な、と思っています。

## 独立のリスク

玄田 田中さんはどうして弁護士になったんですか。

田中 私は均等法前世代なんです。働いても、ちゃんと満足に一生働けないなと思いました。それに一人っ子で、親が死んでしまうと一人になってしまうので資格でもとった方がいいかなと。

玄田 親御さんが弁護士さんとか？

田中 そうではないのですが。男女が平等にできるのは教員か法曹資格なので、法曹資格をとってみたいからかっこいいかなと。自営業ですし。だから、なってみたくて。

玄田 へえ。日本では自分で自分のボスになるという人が他の先進国に比べて増えていない。特に女性の自営業が増えない。どこか原因があると思いますか。

浜田 やっぱりリスクをとりたくないのでは。独立するのが怖いんでしょう。

田中 たしかに経済的な不安が一番ありますけど、でも、やってしまうと、そんな大したことはないんです。弁護士なんか、自宅でやってもいいし、自動車で移動法律相談所だってできないわけでもない。自分の食いぶちだけだったら大したことない。

浜田 今ロースクールなどにも、女性が多いようですね。1回退職して、専業主婦になった人がロースクールに行っているというようなケースもあったり。

田中 この前スチュワーデスをやめて、民間会社を経て弁護士になったという人に会いました。航空会社でいじめに遭って次の会社でもいじめに遭い、やっぱり資格が必要だと思ったようなんです。

玄田 すごいバイタリティーだ。

浜田 大変ですよ。40 ぐらいから勉強するのは。

田中 でも、そういう意味では、司法試験は敗者復活の試験なので、案外、規格外のような人も多いんです。だから、楽しい世界でもあるんだけど。

## 「まじめすぎる」

玄田 均等法の第一世代は、出世とか昇進とか、とにかく頑張りすぎちゃって、結局苦しくなったりしてる。独立するのでも会社で昇進するのでもいいけどうまくやっている女性って、どこか抜けているようなところがある。100点満点を目指すすと、必ず途中でポキッ

と折れちゃう。逆に、ちょっと油断があるとか「すき」がある女性のほうがうまくいってる。ロールモデルになれとか言われ続けると、苦しくなる。

田中 100点なんてとれないですよ。

浜田 前に『アエラ』で「共働きで多産になる」という記事を掲載したんです。共働きしながら3人も4人も産む人を取材したんですけど、一様に彼女たちが言っていたのは「細かいことを考えすぎたり、完璧にやろうと思ったら子供なんて絶対産めない。欲しいと思ったら産むしかない。かわいいし」ということなんです。みんな楽天的なのが印象的でした。「家の中ぐちゃぐちゃだけどいいや。仕事も結構足踏みしちやって昇進も止まっているけど、それもそれでいいや」と。後日、その話が東大卒女性たちのメーリングリストで話題になったというのを聞いて、東大卒の女性たちは今どんな状況で、何を考えているのか知りたいな、と思い、「東大卒女子、40歳の現実」という特集を組みました。取材してみると、やっぱり100点を目指す人がとても多い。

田中 多いでしょうね。

浜田 専業主婦率が意外と高いんです。働きながら子供も産んでというところ、どこか妥協が必要になるのですが、仕事も完璧にやり、かついい母親でありたいという気持ちが東大卒の人には強いみたいで、そうすると、どちらかをやめる選択をしている。勢いというか、はったりで乗り切ってしまうところは少ないかな、と感じました。

田中 たしかにそうかもしれない。

玄田 考えすぎちゃう。どうして、みんなそんなにまじめになってきたんだろう？ 学生を見てると、キャリアを早い段階で考えて、ちゃんとそれこそ資格ぐらい持っておかないとこたえて思うから、気の毒なぐらいまじめ。大丈夫かなと思ってしまう。

田中 でも、そういうことにはなかなか気がつかないんじゃない？ 私も受験は何回か繰り返しましたけど、基本的には気がつかなかった。やはり社会に出て、ガツンと来て、ああ、こんないじめがあるんだみたいなことを経験して。たとえば東大法学部の壁がある。女性の弁護士なんてしよせん女なんだと言われる。そこでみんな自分の道を歩んでいくわけです。正統派の、例えば上場企業の顧問で、事務所において、扇子をあおいでいれば仕事に来るなんていうようなことは無理です。やはり自分の特殊性というのを生かしていかない

と。

玄田 開き直るわけだ。

田中 そうです。そこで頑張れなくて東大法学部を卒業して弁護士資格を取っているのに専業主婦っていう人も結構います。

浜田 司法試験に通っていて専業主婦っていう人はいますね。

玄田 そういう人は旦那も弁護士だったりするの？

浜田 そうとも限りませんが、わりと高収入の人が多いです。

## 規格外の生き方

玄田 今、職場結婚というのは減っているんですか。

浜田 社内結婚率はまだ高いですよ。

玄田 下がっていないのかな？

浜田 結構高いと思います。20代、30代の労働環境がどんどん悪くなってきて、残業時間も増えているので、そうすると、出会いがどんどんなくなっていくという状況にあります。

玄田 国がお見合いの場をもっと設定するようにならなければいけないという意見もあるけど。

田中 絶対反対。

浜田 少子化対策とか、やめてほしい。

田中 規格から外れた人でも OK だということにしなければだめなんです。婚外子をどんどん産みましようでいいんですよ。

浜田 そうですよ。婚外子と夫婦別姓と事実婚を認めないと、子供は絶対増えない。さらに北欧みたいに男の人にも育児休暇をちゃんと取らせるようにしなくては、増えないと思います。

玄田 それは突き詰めると、いい男が足りないってこと？

浜田 そうじゃなくて、結婚というものが非常に限られた型や枠の中にあるうちは、みんなそんな結婚なら別にしなくても、今のほうが楽しいと思ってしまう。

田中 いい男が足りないとか、そういう話じゃないんです。

玄田 ……。

浜田 同世代でも不倫している人はけっこういます。でも、この人の子供を産みたいといっても、婚外子も、シングルマザーも差別されます。シングルマザーだと、養子ひとつとっても制約が多い。結婚制度をガチガチ

に守って、別姓なんてもう何年たっても認められないようななかでは子供は増えないと思います。

## 「不公平じゃないか」

田中 児童虐待とかでも、虐待される前に、そういう子供たちを救える仕組みがあれば悲惨な結果を避けられるはず。それが里親制度はどうなっているかを調べると、健全な夫婦で昼間も子供の面倒を見られるというような人たちしか、原則として里親になれない。だけどシングルで比較的高収入で、ベビーシッターを雇えるとか、保育園に行かせられるというような人で、育てたい人ってたくさんいる。

浜田 そうですね。子供は育ててみたいけれど、今結婚する意思も予定もないという人はけっこういると思います。片や虐待されている子は増え続けているのに、養子制度は旧態依然としたままだし、片や年中絶件数が約34万件にものぼるのに、一方で不妊で悩んでいる人は40万人といわれています。この国はどこかちぐはぐというか、おかしいな、と思います。

田中 おかしいですね。

玄田 そういうのって、だれが反対するの？従来の結婚制度を維持したい人たちですか？

浜田 お母さんが働かないで家にいるほうがちゃんとした子供が育つと思っている人たちって、意外とまだいるんですよ。どういう親だったら子供がちゃんと育つかなんて、形の問題じゃないですよ。

田中 東京では、ほとんど共働きなわけじゃないですか。実子でさえカギ子なのに、養子、里子がカギ子はダメという考え方自体がおかしい。

玄田 引きこもりでも、親は共働きのケースもあれば、専業主婦のケースもあるけれど、そういうカタチじゃなくて、親と子供の距離感みたいなものが、過干渉か無干渉かという極端にいつちやうところに問題はある。事実婚って、男性にとっていいことはあるのでしょうか。

浜田 若い男性もそういう制度から自由になりたいと思っているようです。頼られる、依存されるのは嫌だ。

田中 この前、離婚の相談で、こういう時代になったんだなと思ったのは、事実婚とはちょっと違うんですけども、女房が働かないから嫌だというのがありました。何でおれはこんなに働いてやっついて、自由

にできないんだと。女房は家にいて好きなことやってる。不公平じゃないかと。

浜田 逆に20代男性に結婚しない理由を聞いたら、僕は、今つき合っている彼女に働いてほしいと思っているけれど、彼女が嫌だと言う。でも、僕はそんな経済的負担を1人で背負うのは絶対嫌だ。一方、20代の女性に取材すると、就職も厳しいし、早く結婚したいって言う子が多くて、しかも増えてきている。少しでも早いうちに相手を選んで、結婚して楽になりたい、と。男女の考えが逆の方向を向いているので、男の子はどんどん引いて20代はますます結婚できない。

玄田 それはやっぱり働くのがしんどそうだというふうなイメージがあるから？

浜田 働くのがしんどそうで、いいロールモデルがない。会社はどうせ使い捨てにするだけだという20代の意見をよくききます。

玄田 そういう面が全くないわけじゃないけど、ちょっと過剰な思い込みみたいなのところもあるよ。男女共同参画の話をしていても、案外若い女性から「男並みに働けというのはイヤです」みたいな意見が出てくる。そんなこと全然、男女共同参画と関係ないんだけど、そういうイメージがある。

浜田 20代の子を取材していると、何でこんな簡単に仕事やめちゃうんだろうと思う。

玄田 それはロールモデルができると解決するのかな？

浜田 それがすべてではないとは思いますが、でもやっぱり、「こういうふうに通じてたら、ああいうふうになれて、まあまあ幸せそうだな」みたいなのがわかれば、将来の不安は少しはなくなるでしょう。いつも20代の後輩に言われるのは、「30代後半の負け犬の先輩を見ると、あんなに疲れてしんどそうで、あんなふうにはなりたくないです」って。

玄田 ステレオタイプの文言だ。

浜田 私たちは「結構これで楽しくやってるんだけど」と思うんだけど。

## 結婚のリスク

玄田 子育て中の主婦の悩みとか、最近どうなんでしょう？ 専業主婦になって、今まで会社で一生懸命やっていたのに、急に人間関係が閉じたり、孤独で嫌だとか。

浜田 さっきの敗者復活じゃないですけど、日本は1回退場しちゃったら、ほんとうに戻れない社会なので、1回結婚退職すると、なかなか正社員でもう勤めることが難しい。スーパーのレジ打ちのパートで稼ぐお金との費用対効果を考えたら、いまのままの専業主婦でいいと考える人も多いですね。

玄田 でも今は、旦那が急に仕事を失うとかリスクが高まったことを考えると……。

浜田 やっぱり自分だけはならないと思っているんですよ。

玄田 リスク管理や危機管理というようなことは、ピタッと自分の感覚じゃないんだ。

浜田 離婚も、自分だけはないと思う。

玄田 離婚する人にパターンってあるの？

田中 やっぱり基本的には男性の浮気が多いですよ。

玄田 40代とか50代とか？

田中 結構あります。

玄田 熟年離婚っていうのはどうなの？ 増えている話をきいたけど。

田中 それも、きっかけは浮気が結構多いですよ。

浜田 今の人、我慢しないですよ。

玄田 しかもはっきりとした理由があるわけじゃない。でもそういえば定年男性を「濡れ落ち葉」と言わなくなったね。

田中 働いている人がほとんどなんじゃないですか。60代前半だと。

玄田 それが若い人の就職を苦しめたりするんですけど。

浜田 息子がフリーターだから、お父さんは仕事をやめられない。団塊の人が定年退職を迎えるときは怖いと思います。自分が退職した後、家のローンも残っていて、息子はフリーター。一家心中するしかない、というお父さんに取材したことがあります。

## 教わらないリスク

玄田 あまり統計とかに出でこないけど、シングルマザーは深刻化してるんでしょうか？ イギリスのニート女性の場合、シングルマザーって多いんです。

浜田 離婚して、シングルで育てている人は結構多いですけどね。

玄田 結婚前とかはまだそんなに多くないんだ。

田中 よっぽど自分に自信がないと産まないんじゃない

ないですか。そういう力がある人だけがシングルマザーになる。

玄田 一方で10代の中絶率は、90年代に倍増です。教育の問題でしょうか。

浜田 10代の子たちになんでセックスするのかをきいてみると、別に相手が好きだからということだけではないんです。

玄田 断りきれないのかな。

浜田 そうですね。友達関係を崩したくないという理由が多い。男の子に迫られたとき、「ノー」と言ったら友達じゃなくなっちゃうかもしれない不安がある。それで妊娠するとか、性感染症になる可能性があるとか、エイズもすごく増えていますけど、そういう危険をちゃんと教わってない。それにびっくりしたのは、10代の子がセックスする場所で一番多かったのは自宅なんです。

玄田 親がないから？

浜田 専業主婦のお母さんがいても、部屋には絶対入らないから。子供に何も言えない親が多いので、例えば、もう部屋で何をしているかわかっていても、親は口を出さない。言ったら嫌われるのが怖いんでしょうか。

## 職場のいじめ

玄田 離婚とかセクハラとかDVでも、かなり心の病気の人がいるでしょう。弁護士さんは、精神科医と連携して何かやったりするの？

田中 連携するというか、そういう被害に遭った人には、必ず医者に行きなさいというふうには言いますよね。

玄田 行かないでしょう？

田中 行きますよ。女の人だと、比較的すぐ行く。そう敷居も高くない。

玄田 それは相談に行くということ？

田中 もし、眠れないことがあれば、精神的な問題もあるかもしれないので、早めに行って、対処したほうがいいでしょう。仮に医者から問題ないと言われれば、それで安心できるわけで、精神科に行くことは、全然おかしい話じゃないですよと言えば、紹介したところに行くことが多いですね。しかし、男の人は難しいですね。

玄田 なぜ？

田中 やはりそういう精神的に落ち込む自分というのが許せないし、精神科に行くということ自体が、自分が欠落した人間だというふうに烙印されると思うから。

玄田 会社の中でのメンタル対応は、いい方向に向かうんでしょうか。

田中 パワハラっていうのがあるじゃないですか。今セクハラ相談窓口がパワハラ相談窓口に移行しつつあるところもあるようです。徐々にですが……。

玄田 同じ窓口で対応するわけ？

田中 せざるをえないでしょう。

玄田 具体的にどこが担当するの？

田中 人事とか。でも大企業だと別に窓口を設けている。110番みたいな電話相談のシステムをもつところもあるし。

玄田 中小企業は？

田中 中小企業は、労働基準局とか、労政事務所とか。今一番多いのは、セクハラよりもいじめなんです。退職を強要するとか、その他いろいろ。

玄田 職場のいじめ対策は、進んでるんですか。

田中 皆無だと思います。セクハラがやっと認知されましたが、パワハラという、「指導でしょ？ そのぐらい言ったってしょうがないんじゃないですか」という答えが返ってくる。

浜田 どこからがパワハラというのは、難しいですよね。

玄田 立場の違いがまずあったり。

田中 人格を非難する。バカとか、クソとか、人格をおとしめる言葉を言う、仕事を与えない、机をどこかへ移動するとか。

浜田 それはやはり労働環境が厳しくなって、不景気だからということが増えてるんですか。

田中 それだけじゃないと思いますけど。昔はセクハラは職場でOKだったわけじゃないですか。しかし、権利意識が高まって、おかしいものはおかしいというようになった。

浜田 それは、やはりパワハラという概念が出てきたからということですね。

田中 そうですね。パワハラという言葉が与えられて、問題に気づく被害者たちが顕在化してきた。

## 「人事の情熱」

浜田 今は会社の二極化が激しいと思います。女性の管理職登用の度合いを取材すると、旧態依然の会社は本当にそのままなんですけど、意識が高い会社は社会的貢献もしなければいけないと、外からのプレッシャーもあって結構進んできているという感じをうけます。

玄田 企業の社会的貢献の見直しはどうでしょうか。

浜田 まだ外資系が多いですけどね。

玄田 2007年のISO基準の見直しで会社は変わると思いますか。人権とか男女共同参画などに企業はより積極的になる？

田中 もちろん、積極的にならざるをえない。企業の社会的責任がISO基準になることで国際市場で生き残るには、日本企業が置き去りにしがちだった人権、女性問題にどうしても対応していかなければならない。ISO基準が米国、EUなど何をスタンダードにするかはわかりませんが、アメリカでは、自社分の従業員や役員に占める女性のパーセンテージ、それから高額収入の者のうち女性が占めるパーセンテージというように各社比較するわけですよ。

浜田 数値目標を挙げてますね。

田中 NGOなどがあって、そういうところが評価をする。さらに、SRI（社会的責任投資）につながる。

玄田 評価機関ですか。

浜田 アメリカだと、女性はカタリスト（Catalyst）という有名な団体が評価を行っていますが、日本には客観的に評価する機関がないですよ。

玄田 日本に足りないのは、そこですか。NPOも増えてきたけど、やっぱりまだまだ軌道に乗ってないところも多い。

浜田 実際女性の登用に熱心な企業は、最終的には人事の社員の情熱にかかっているな、という印象を持っています。根回しに時間がかかるから、最後は一つひとつの部署を回って、部長を説得する。それを地道にやれる人がいるかどうかという感じです。

玄田 そのときに親分のひとことや後押しがあると、とてもやりやすいはずなんですけど。

浜田 もちろんです。でも親分のひとことだけでは、絵に描いた餅です。外資系は簡単で、本社が全世界的に数値目標を宣言し、女性の登用率が低い部署や支社の管理職の給与や査定を下げるなど徹底するから、や

らざるをえない。日本企業は人事の現場の人のやる気次第ですね。

玄田 人事部長クラスじゃなくて、もうちょっと現場の人ですか。

浜田 ええ。ある女性登用に積極的な企業の広報部長も、最後は人事の男性の情熱だったと言っていました。新たな登用制度を立ち上げる時、20代や30代の4人くらいでワーキンググループをつくって、全部の部署に説得をして回ったそうです。

玄田 たまに男女共同参画で講演をしたりしますが、私は「そろそろ、男らしさ、女らしさもいいけど、その人らしさのほうが大事でしょう。ポジティブ・アクション（積極的に正措置）も、やると案外もうかるみたいですよ」と言ってる（笑）。そういう仕掛けが大事みたいです。

浜田 そうですね。やっぱり基本的にポジティブ・アクションも、結局は「単なる社会貢献だけでなく利益につながっていますよ」ということを言わないと会社はやってくれない。

玄田 そうそう。そういう調査研究も出てきたし。

浜田 経済産業省の児玉直美さんたちの研究のように、利益が出るということと言わないと、経営者は動かない。利益が出るには、男女を問わず社員の能力を発揮させるような会社風土であるほうがより影響が大きいというデータを示していて、おもしろいです（編集部注：児玉直美「女性活用は企業業績を高めるか」本誌2004年4月号（No. 525）38-41頁等を参照）。

玄田 あの研究結果はかなり反響があったみたいです。

浜田 成果主義を導入し、本当に成果を正に評価するなら、女性は少し無理をしても働きます。育児休暇の期間を長くするよりも、戻ったときに、ちゃんとポジションがあって、仕事があって、「君が戻ってきてくれてほんとうに助かったよ」のひとことがあり、能力を評価してくれるかどうか。そういうことがやっぱり大事だと思います。

玄田 そのひとことができてないんだ。児玉さんたちの研究は上手に書いてあって、別に女性の数の問題じゃないんだと。それは結果的にそうなるだけで、勤め続けることに対して、もう男も女も関係ないといった会社風土でないともうからないという書き方になっている。

会社の中の問題って、ポジティブ・アクションでも



実感するのは、これをうまくできるのは、トップや、さっき浜田さんも言ったような人事の人たちがやっぱり魅力的な場合が多い。

浜田 人を説得しないとイケないですからね。

玄田 上手に男も女も口説くんです。不況になって唯一よかったのは、そういう本気の人たちが出てきはじめた。だから男女共同参画も、私はいつも楽観的というんです。

浜田 私は悲観的です。取材していても、「だめだ、日本は」と思ってしまう。変化が遅すぎる。

田中 でも企業社会的責任の ISO 基準づくりが決まり、世界も変わっていくのだから、日本だってそれに追いついていかなければいけない。大手ビール会社は、取引先にも社会的責任に関するアンケートをして、新規取引を含めた調達先選定の評価に反映するとしています。そうすると、下請企業もそういう基準を満たすよう努力するようになる。女性の知事が増えていけば、入札の資格で、人権、女性問題などの社会的責任基準を満たす企業でなきゃ入札可能にしませんよということに次第になる。そうすると中小企業だって、それに合わせないと利益にならないわけだから、変わっていく。日本の企業は、公共事業にかなり依存しているから、入札制度が変われば、かなり状況はよくなるはずですよ。

浜田 競争力としても、女性を採らないと損をしていると思うんですよ。これから企業の自然淘汰も進んでいくと、結局、強い企業というのはちゃんと女性を活用しているというのがわかれば、女性の登用は進むと思うんですけど。

## 育成というキーワード

玄田 2007年ぐらいからそうなるんじゃないの？

田中 一気には無理でしょう。でも、いろいろ仕掛けをすれば動くかもしれない。

玄田 僕は3年後ぐらいには、企業のあいだで男女共同参画の成果にはっきりと差が出てくると思う。それまで試行錯誤を続けてきた会社にも効果が表れてくる。だから楽観的なんです。今まで何もしてなくて、急にやろうとしてももう間に合わないし、そんな会社がだめになるのはしょうがない。

田中 でもそこでネックなのは、20代の女性の意識ですよ。会社は「あなたの仕事を用意しました」と

言っても、「私はそんなに頑張るつもりありません」って言うのが、20代ではすごく多い。

玄田 だからキーワードは育成なんです。就職した直後は一部の人を除けば男でも女でも、働く意欲なんてそんなにないですよ。ほどほどでいいと思ってる。だけど仕事なんて、どこかでいい意味でだまされてやってしまった、それが案外よかったってことでしょ。それが育成なんです。

ある県で、女性が営業担当か何かに急に抜擢された。男尊女卑が激しい県でたいへんだった。でも直属の上司とかが取引先に演説をぶつ。「この人にやらせてください。絶対にいい仕事します。何かあったら絶対私、責任とりますから」って。上手にやるんです。そうすると、働く意欲がなかった人たちも「私、期待されている。やったらじゃないか」ってなるんです。

会社のエライ人が「うちの会社の女性は働く意欲が弱い」とかっていうのは、自分や会社に魅力がないって言ってるのと同じ。みっともないから、やめたほうがいい。

僕が働く女性の将来に楽観的なのは「うちは男女共同参画なんて関係ない」って言ってる中小企業にかぎって、ちゃんと女も男も関係なく、上手にだましたり、育ててたりするからなんです。

浜田 結構、中小企業が頑張ったりしますよね。

玄田 「男と女は平等じゃない」なんて言いながらも、「こいつが女だから支援してるんじゃない、〇〇(個人名)に期待しているだけなんだ。こいつに何とか残ってもらうために、子供を産んでも仕事が続けられるよう、近くの社宅が1戸空いたから、説得して入れたんだ」みたいなことを言うんです。それでいいんです。

## 30代の壁

玄田 ある会社では、派遣さんとか契約さんの契約が切れるときにも、すごく手厚く送別会をするそうです。派遣さんとか契約さんって、情報管理とかを實際やっていたりするから、これはリスク管理の一環でもあるわけです。派遣さんだからって単に「はい終了、さようなら」ではだめなんです。

田中 でも、やっぱり人材育成を考えると、派遣じゃいけない。

浜田 私もそう思います。

田中 要は企業として、人材を大切に扱っていかない企業というのはだめだと思いますね。

浜田 働き方は個人の自由ですから、派遣とか契約みたいな働き方があってもいいとは思いますが、やっぱり取材すると現実には厳しい。30歳過ぎると壁があって、仕事がおなくなったり、来ても遠隔地の職場を用意されたり。

田中 でもそういうふうには採った派遣というのは、ほんとうにその会社のためになるのかって言ったらならない。

玄田 派遣さんと正社員さんの結婚って、結構あるものなの？

浜田 少ないんじゃないですか。いろいろな感覚、価値観が違うから。ある商社は一般職の採用を復活させました。情報管理の問題なども含めて、リスク管理の部分も大きかったようです。ただ本当は契約とか派遣からスタートしても、ちゃんと働きたいと思っている人は登用したほうがいいと思うんですけど。

玄田 正社員にするとということ？

浜田 20代のときは派遣でいいって言っているけど、そのまま30代ではまず結婚できない。収入が安定しませんから。30代で正社員になろうとしても、なかなか就職はないですよ。

20代のフリーターの男性は、アルバイトでも責任をもって働きたい、毎日でも来たいと言っても、社会保険の関係で、就労調整させられたそうです。結局、アルバイトをかけたそうです。

玄田 そういう実態は、私たちもしっかり研究しなければいけない。フリーターと言われている人たちが相当就労調整させられてるかもしれないんだけど、保険とか加入対象になってない人が何割ぐらいいるかがわかっていない。そういう調査がない。

浜田 彼らはギリギリの生活をしているから、社会保険料の未納も多くなる。彼らの未納を責めるのは簡単ですが、企業の雇い方のほうが問題が大きい。

玄田 非正社員の税徴収を徹底化するという話ができていますけど、そうであれば逆にそういう加入逃れのようなケースもちゃんとチェックしないとイケないですよ。

浜田 でも、契約社員って、ほんとうにあつという間に切られちゃいますね。

田中 そういうことをするために、正社員にはしていないんです。

「ちゃんといいかげん」

玄田 「仕事と家庭の両立」とかもそうだし、ニートもそうなんだけど、なんか働くことの議論ってというのは、ちょっとまじめすぎる気がしませんか。本当は仕事なんて「ちゃんといいかげん」くらいでないとダメでしょう。ちゃんとしすぎると苦しいし、いいかげんに考えすぎても後でしっぺ返しがかかる。けど、それを自分なりにバランスさせたり、ときには流れに身をまかせながら、ちゃんといいかげんに生きること、仕事をする 것도、とても大事だと思うんだけど。

浜田 ちゃんといいかげんって、いい言葉ですね。子供を産むのも、ちゃんといいかげんにぐらいじゃないとね、産めないんですよ。

玄田 ニートたちには、本当にいいかげんさが足りない。

浜田 30代の人が過労死したりするのも、ちゃんといいかげんにできないから。

玄田 ほんとうは社会が成熟するといいかげんに調整されていい感じになるはずなんだけど、不安のほう先立つから、何かみんなつまらない計算をしちゃう。本当は最悪のときのために対処さえできていけば、後は開き直るくらいでいいと思うんだけど。ところで、最悪な事態とか、自分だけで自分の身を守れないようになったときのために、何かアドバイスみたいなのはありませんか。

田中 何かあれば、早いうちにだれかに相談できるようにしておくのが一番ですよ。それこそ誰でもいいと思う。相談できる人がいるといい。身内の人がいなければ、それこそ、弁護士会に来て、法律相談してみよう。

玄田 そういうとき、どこに電話すればいいの？

田中 弁護士会に行けば、30分5000円からですから。手相占いよりもお得ですよ（笑）。

玄田 実際、いいんですか。

田中 相談を受ける人によりますけど（笑）。でも、とりあえず司法試験に受かった人が聞くわけですから。他にも市役所の無料相談とか生活相談とか、いのちの電話でもいいし、とにかく誰かに相談するといいですよ。

玄田 話をするだけでもいい。

田中 そう。聞いてもらえる。

玄田 『仕事のなかの曖昧な不安』っていう本を書いたときに、「ウィークタイズ」っていう言葉にすごい反響があったんです。たまにしか会わないぐらいの関係なんだけど、会うと打ち解け合って話ができるとか、相談できるとか、そういう自分と直接的にいつも一緒にわけじゃないけど、何かつながっていて、相談できる関係みたいなものを持つことが、これから転職や独立を含めて働く上では有利なんだよと。その話が若い人にすごいウケる。

田中 でも、やっぱり引きこもりや、ニートは、ウィークタイズを持つこと自体が難しい。

玄田 それはもう大変です。ストロングタイズだっていないんだから。

田中 だから、海外の教会みたいに、懺悔するような場所、とにかく聞いてくれるような場所、カウンセラーであるとか、そういう場が必要なのかもしれない。

玄田 ほかには農業とか。過度な人づき合いとか、自分探しから逃れるためには、お天道さんの下で暮らすのが一番いい。

浜田 農業志望者、今多いですよ。ある人材派遣会社が、大潟村と組んで、フリーターの人を募集して、農業をやるって募集したら、10人のところに100人来たそうです。フリーターだけでなく、元会社員という人もいたとか。フリーター最後の聖地は農業かもしれない。

田中 農業は結構もうかるんですよ。ある所で「億友会」という親睦団体があって、1億の資産がある農家が集まっている。でも、人数が多くなって「五億友会」を作らないとだめだなんて話になっている。そういうふうには、農業ってもうかるんだとあって、知らないですよ。何かすごい零細なイメージしか持っていない。

## 男性の育児休業

玄田 最後に、男性の育児休業について一言。

浜田 どうして日本って、こんな取れないんでしょうね。取りたい人は増えてるんですよ。

玄田 厚生労働省が出した男性の育児休業取得率1割というの、調査の結果1割ぐらいい取りたいって思ってるからっていうんですよ。

田中 やはりみんなと違うことはやりたくないんじゃないでしょうか。みんな強制的に取りなさいという

話になれば取るんだと思いますけど。この1年間で妊娠した人の中でくじ引きで取りなさいとか、業務命令とか。

浜田 会社としては何%取らせなければいけないから、じゃあ、あなたとあなたは取ってくださいぐらいやらないと……。

玄田 そうかあ、くじ引きかあ。でも、そのぐらいの何か、人生どう転ぶかわからないぐらいのところがあっても本当はいいのかもしれない。その一方で、取ったほうがいい根拠もある。産後うつ病に17%の人がなるという数字があるんです。うつ病には治療もさることながら、周りの支援がゼツタイに必要。だから旦那は、奥さんが産婦人科を退院してからの1週間でいいから家にいるだけで随分状況が違う。僕が人事部だったら、無理しても1週間は家にいろって言う。それで家庭が落ち着くんなら会社にとってもプラスなんです。

浜田 そのほうが、後々、効率もいいですよ。

玄田 奥さんが産後うつ病にでもなっても、働き続けられる男性がいたら、よっぽどスーパーマンか、よっぽど鈍感のどっちか。大体後者なので、危険なんです。でも、そういう情報は知られていない。だから、そういう問題についても『日本労働研究雑誌』でも、もっと研究したりしないといけないんだけど。

浜田 このまえ、共働きの男性の同僚が、子供が熱を出したので、保育園に迎えに行ったら小児科に6時に連れていったら、連れてきている親の8割がお父さんだったと言っていました。お父さん自身も、育児には興味もあるし、お母さんが彼以上に忙しいという人も増えている。でも男性の場合、会社側がなかなか理解してくれない。

玄田 みんながやらないから僕もやらないし、結局みんなやらないっていうのと、みんながやるから僕もやろうと思って、結局みんなやるというのって、何かやじろべえみたいなもので、どっちに転がるか、ほんとうは偶然とか運みたいなものだったりする。だから何か大きなショックがあると、男性の育児休業もみんな取らない方向からみんな取る方向へと、ポンと移ったりするかもしれない。だから育児休業も、法律的にやるということもあるし、それ以外にも何かそういう、後押しする機会があるといいんだけど。

田中 1週間からいいかもしれないですね。法定休暇にしましょう。

浜田 そう。1週間ぐらいとか、1カ月とか。

## 共感の輪

玄田 男性で育児休暇を取っている人は少ないけど、2タイプあって、信条・イデオロギー的な育児休暇派と、仕事ができるから休めるというタイプとあるんです。後者に聞くと、育児休業を自分にとってのチャンスだと思っている人もいます。ここで1回ちょっと職場から離れて自分を見直すチャンスに使えるとか言う。そういう意識を広げていって、育児休暇を取る男性は仕事のできる人が多いという共感の輪を社会に広げていく。

浜田 玄田さんが『アエラ』でコメントしてくださったときも、ニートの問題はニートのことに共感したり、わかってくれる20代に期待しているって言われまし

たよね。多分男性の育児も、30代以下はかなり意識が違うので、そういう男の人に期待するしかない。

玄田 そうなるといいね。今はまだ点在してるからね。それを何か点を線にして、最後、面にするような。トライできるような何か仕掛けをつくるとか。

本当はCSRなんかも、そういうのによく絡められるといい。やってみたら、案外よかったなど。男女共同参画なんて面倒くさそうと思ったけど、やってみると、会社はもうかったって。実際、経営は効率化する。でも最初はやはり何か仕掛けやきっかけみたいなものがないと、みんな不安だからね。『日本労働研究雑誌』も、これからは、そんなヒントとなるような正確な情報や研究を発信していければいいと思います。

(この座談会は2004年11月1日に行われた)

# 大原社会問題研究所雑誌

**No.555 2005.2**

定価 1000円 (本体952円, 年間購読 12,000円)

**【特集】21世紀社会システムとNPOの可能性 (2)**

民間非営利セクターの全体像をどうとらえるか?

山岡義典

**■論文**

A市高齢者事業団の損害賠償裁判と安全管理  
政策ネットワークと社会福祉改革

小林謙一  
稗田健志

**■研究会報告**

最近のドイツ金属産業における雇用保障と労働条件をめぐる労使対立

高橋友雄

**■書評と紹介**

塩沢美代子著『語りつぎたいこと』

鹿野政直

杉本貴代栄編著『フェミニスト福祉政策原論』

森川美絵

曾良中清司・長谷川公一

町村敬志・樋口直人編著『社会運動という公共空間』

手島繁一

社会・労働関係文献月録

法政大学大原社会問題研究所

発行/法政大学大原社会問題研究所

〒194-0298 東京都町田市相原町4342 Tel.0427-83-2307

発売/法政大学出版局

〒162-0843 東京都新宿区市谷田町2-14-1 Tel.03-5228-6271